

『池田要 京都・大阪アクセント資料』所載の 動詞・形容詞のアクセント

上野和昭

キーワード：動詞アクセント・形容詞アクセント・京阪アクセント・『池田要 京都・大阪アクセント資料』・アクセント史

0. はじめに

ここに分析の対象とする『池田要 京都・大阪アクセント資料』は、もと池田要氏（1907年滋賀県生）が国学院大学に提出された卒業論文「近畿アクセントの研究」の資料編のごときもので、秋永一枝氏は「昭和六年（1931）以前、成人に対して行われた調査であり、インフォーマントの生年は恐らく1900年以前と推測」する（下記五十音順索引「あとがき」）。原本は金田一春彦氏の蔵するところ、上下二冊。収録語は約2万語を数え、京都・大阪それぞれのアクセントを独自の表記方式によって対照し、それを品詞別、拍数別に配列してある。原題は「近畿方言に於けるアクセント」。『池田要 京都・大阪アクセント資料』（以下『池田資料』）というのは、その五十音順索引を刊行する際に付けた仮のものである（上野和昭・秋永一枝・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊 編 2000年3月アクセント史資料研究会）。

筆者も参加しているアクセント史資料研究会では索引作成と並行して、これを分担検討し、近代京阪アクセント史の上に位置付けようと考えた。そのうちの用言（動詞・形容詞）の部分を担当するのが本稿であるが、紙幅の都合上、ここでは動詞三拍以下、形容詞四拍以下と拍数を限定し、和語の口語形を検討の対象とする。また同資料の「原表記」は主として歴史的仮名遣いに拠るが、ここでは現代仮名遣いに改めて掲げる。

なお、すでに本書については要領を得た紹介が、中井幸比古（2000; 5）にある。それによれば『池田資料』は「研究史の面での価値が高い」とされ、本稿に関わることでは「動詞のア（「見せる・思う」の類）からみると、池田氏の大阪の話者は、明治10年以降の生まれであろうかと思われる」という。またいわゆる「昇核現象」についても述べられていて、三・四拍体言では「池田資料は京都と大阪の差が非常に小さく、ともに、ある程度起こしている、という状態にある」とされる。もっとも「研究史の面での価値」と言われるのは、京阪アクセント史の主流からは外れているのではないかという意味にも受け取れようから、ここでは用言に限定するにしても、他のいくつかの資料と比較して『池田資料』の性格を明らかにしたい。本稿で比較対照する諸資料は

以下のとおり。

[京都]

- (1) 秋永一枝編 (2001)『金田一春彦調査京都アクセント転記本(榎垣実京都アクセント記入)』(アクセント史資料研究会) 略称『**金田一**』、被調査者などの詳細は不明。「序」には転記から「四十年近くたった」というのみ。
- (2) 秋永一枝編 (1998)『榎垣京都アクセント基本語資料—東京弁アクセント付き—』(アクセント史資料研究会) 略称『**榎垣**』、同書「序にかえて」によれば榎垣実氏は1901年京都府竹野郡網野町生、言語形成期は京都市上京区。上記『金田一』に書き込まれた「榎垣実京都アクセント」を含む。一部大阪アクセントも記載あり。これについて【表】では大阪の「ほか」欄に「榎」として掲出。
- (3) 平山輝男編 (1960)『全国アクセント辞典』京都(東京堂出版) 略称『**平山**』、「はじめに」(平山氏執筆)には「生粋の京都っ子…10名」とあるのみ。個人名も挙げられているが生年未詳。
- (4) 中井幸比古編 (2001)『京都市方言アクセント小辞典 付、京都府中川・滋賀県野洲方言アクセント』(科学研究費研究成果報告書) 略称『**中井京都**』、「前書」によれば、1898年～1971年生の京都市育の男女14名、ほかに滋賀県野洲町(1917生)、京都府中川北山町(1910生)生育の女性各1名。
- (5) 平山輝男ほか編 (1994)『現代日本語方言大辞典』第8巻 京都(明治書院) 略称『**現日**』、京都は1901年～1927年生の男女各4名の調査。
- (6) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2000-2001)『日本国語大辞典』第二版(小学館) 略称『**日国**』、第二版は、初版に中井幸比古氏の「明治30～40年代から大正初年生まれの数名の話者」(凡例)による追加あり。

[大阪]

- (1) 杉藤美代子編 (1995)『大阪・東京 アクセント音声辞典』CD-ROM版(丸善) 略称『**杉藤**』、大阪の高年層は、1916～32年生の男女3名、若年層は1962～64年生の女性3名。【表】に(7)とあるのは、若年層に二人までその型が報告されていることを示す。
- (2) 中井幸比古編 (1998)『初期落語 SPレコードの大阪アクセント—資料と分析—』(科学研究費研究成果報告書 研究代表者 金沢裕之) 略称『**中井大阪**』(初期落語)、「演者が明治初年以前大阪生まれで大正末年までに録音」という条件を満たすSPレコード録音資料。このうち桂文雀だけが新型を発音するというのが、下記中井(2000)によれば、1870年奈良生とのこと。動詞については、三拍五段二類相当の動詞における基本形H1型→H0型、否定形(志向形も)H2型・H1型→H0型の変化は、「近畿中央式各地で、明治末頃に」変化したことが知られているとして、それが「3拍1段2類相当の変化にやや先行して、起こったようであ

る」と述べる。4拍動詞の類の合同も終わっていた模様。牧村史陽『大阪ことば事典』は、この点(3拍動詞の変化)についてはみな新型をとるという。形容詞も類の合同後のアクセントを反映する。

- (3) 中井幸比古編(2000)『大阪アクセントの史の変遷』(科学研究費研究成果報告書) 略称『**中井大阪**』(松鶴)(幕末落語)(NHK)、(松鶴)は五代目松福亭松鶴(1884年大阪生)、「幕末生の落語家と比べて動詞の一部のアクセントがやや新しく、牧村氏(1898生)よりはかなり古い」とされる。(幕末落語)は幕末生まれの落語家によるSPレコード、(NHK)は『NHK全国方言資料』の牧村史陽氏と入江ゆき氏(1890年頃大阪船場生)との対話の分析。
- (4) 平山輝男ほか編(1994)『現代日本語方言大辞典』第8巻 大阪(明治書院) 略称『**現日**』、1893年～1926年生の男性3名と女性2名の調査による。
- (5) 牧村史陽編(1984)『大阪ことば事典』講談社学術文庫版(講談社) 略称『**牧村**』、編者牧村氏は1898年大阪船場生(1979没)。中井(1998:29)によると1955年版、1979年版との間に多少の相違がある由。【表】では大阪の「ほか」の欄に「牧」と記す。特別な意味に用いられる場合も、語形が一致していれば注記したところがある。
- (6) 堀井令以知編(1995)『大阪ことば辞典』(東京堂出版) 略称『**堀井**』、編者堀井氏は1924年京都生。【表】では大阪の「ほか」の欄に「堀」と記す。「牧村」と同様、特別な意味に用いられる場合も、語形が一致していれば注記したところがある。

1. 動詞のアクセント

1.1 一・二拍動詞

1.1.1 まず基本形が二拍で、連用形が一拍からなる動詞について検討する。『池田資料』に収載されたものは、その基本形のみを数えれば11項目あるが、それぞれについて命令形が、たとえば「居よ、居ろ」などと〈一ヨ形〉と〈一ロ形〉と両様に記載されている。これらを、そのアクセント型によって分類すれば以下のようである。(振り仮名は必要に応じて〈〉内に記す。以下同様)

[1] A (基本形 H0型、命令形 H1型) 8項目

居る、射る、鋳る、得〈エ〉る、似る、煮る、寝る、経〈ハ〉る、(する)

B (基本形 L0型、命令形 H1型) 3項目 出る、見る、来る

1.1.2 サ変動詞「する」は基本形を掲げず、命令形として「為〈シ〉ろ・為〈セ〉い・為〈セ〉よ」をとともにH1型として載せ、さらに禁止形「為〈ス〉な・為〈セ〉な」もH1型とする。またカ変動詞「来る」は基本形L0型、命令形は「来〈コ〉い」H1型のみでB類に加えられる。そしてこれらA類・B類それぞれの諸語は、史的变化を典型的に分類した《早(稲田)語類》の第一類と第二類とにはほぼ一致する。

1.1.3 もっとも「得〈エ〉る・経〈ハ〉る」は《早語類2△》ではあるが、△は現代京都アクセント

トと対応しないとされるから、むしろここではA類にあってよいものである。

1.1.4 『池田資料』では「射る」にのみ基本形にH0とL0の両型が記載され、アクセントのゆれが認められるが、他資料を調べてみると京阪ともに、あまり日常的でない語には同様なことが言えるようである。末尾に掲げた【表1】の太枠内が『池田資料』所載のアクセント型、／印はその資料にアクセント注記がないということ（以下同様）。『杉藤』の「経る」に出るH1型（高年層）は標準アクセントの干渉によるものか。

1.1.5 上記1.1.4について、その「ゆれ」がいつごろまで遡れるものであるかが問題となる。文献資料に徴するに、「鏝る・得る・経る」は、少なくとも近世までは伝統的な型を保持していた模様で、このようにL0型も聞かれ出すのは、近代以降のことらしい。「射る」はすでに院政・鎌倉のころから二類型もあったか。『杉藤』の傾向なども勘案するに、『池田資料』がこれにのみ「京2・阪2」としてL0型を加えているのは不審ではない。むしろこれ以外にL0型を記載しないことの方に注目すべきか。以下、史的考察は主に秋永一枝ほか編（1997・98）『日本語アクセント史総合資料 索引篇・研究篇』（東京堂出版）による。

1.2 二拍動詞

1.2.1 基本形・連用形が二拍の動詞（五段動詞）は、京阪ともに以下のように分類される。【表2】は問題となる項目のみを抜き出したもの。

[2] A（基本形H0型、命令形H1型）95項目

開く、言う、入る、要る、浮く、産む、売る、追う、措く、置く、押す、居る、織る、買う、貸す、刈る、借る、狩る、仮る、訊く、聞く、利く、汲む、消す、蹴る、越す、漉す、濾す、咲く、布く、敷く、轆く、死ぬ、知る、吸う、隙く、漉く、梳く、耨く、添う、焚く、抱く、足す、足る、散る、突く、継ぐ、次ぐ、積む、摘む、吊る、釣る、問う、飛ぶ、泣く、鳴く、鳴る、抜く、塗る、退く、乗る、穿く、履く、佩く、張る、貼る、引く、退く、挽く、敷く、弾く、轆く、拭く、踏む、振る、減る、抛る、舞う、巻く、向く、剥く、揉む、盛る、焼く、止む、遣る、結う、言う、行く、揺る、呼ぶ、寄る、沸く、湧く、割る

B（基本形L0型、命令形L2型）99項目

合う、会う、飽く、有る、忌む、煎る、撃つ、打つ、倦む、膿む、笑む、負う、折る、飼う、書く、搔く、勝つ、噛む、切る、食う、組む、繰る、請う、抜く、漕ぐ、込む、凝る、裂く、刺す、去る、好く、済む、住む、澄む、刷る、摺る、掏る、堰く、咳く、急く、競る、反る、出す、経つ、断つ、立つ、就く、着く、附く、搗く、照る、解く、説く、溶く、砥ぐ、磨ぐ、富む、取る、絢う、凧ぐ、為す、済す、成る、生る、縫う、脱ぐ、遡る、練る、飲む、這う、掃く、吐く、剥ぐ、食む、吹く、臥す、伏す、降る、干す、掘る、彫る、蒔く、増す、待つ、満つ、筆ぐ、蒸す、召す、減る、挽ぐ、筆ぐ、持つ、漏る、病む、酔う、読む、撰る、縫る、分く

C 京都（基本形 H0型、命令形 H1型）大阪（基本形 L0型、命令形 L2型） 2 項目

嗅ぐ、止す

1.2.2 A 類に95項目、B 類に99項目が分類される。そして、A・B の諸語はそれぞれ《早語類》二拍動詞の第一類と第二類とにほぼ一致する。ただし第三類とされる「居る」は、すでに第一類と合同を遂げている。『日国』『中井京都』や『杉藤』にみえる H1型が古形である。二・三拍動詞相当のナ変から、二拍動詞五段活用に転じたとされる「死ぬ」も A 類。『牧村』に「死ぬる」H0 が記載されていることからすれば、『池田資料』にも同様にあってほしいところ。

1.2.3 A 類に属す「織る」は『金田一』『平山』『現日』『杉藤』などみな基本形 L0型を載せるが、『中井京都』は H0型・L0型両様。『日国』は H0型のみ。史的には H0型が古く、『池田資料』は京阪ともに古形のみを記載する。このほか「添う」が京都で、「退く・舞う・結う・沸く・湧く」が大阪で、それぞれ他資料において L0型も報告されているが、『池田資料』は H0型である。

1.2.4 B 類に属す「笑む・凝る」は《早語類 1△×》であるから、このままで他の資料とも符合している。同じく「去る・増す」は《早語類 1》でありながら、『池田資料』が京阪ともに基本形 L0型なのは不審であるが、これも「去る」は『榎垣』以外の資料に、「増す」は『平山』『中井京都』に L0型が記載されている（『杉藤』は H0型・L0型両様）ことからすれば怪しむに足らない。もっとも『池田資料』京都の命令形「去れ」に H1型が記載されているのは、基本形としては H0型に対応するもの。潜在的には H0型もあったとみてよさそうである。

1.2.5 同じく B 類に属す「飽く」は『池田資料』で京都 L0型・H0型両様。大阪は L0型のみ。他の京都アクセント資料みな H0型を報告するものはない。しかし、大阪では『杉藤』の高年層に H0型もある。

1.2.6 このほか「風ぐ・病む」は京阪両方の他資料に、また「搗く・満つ・挽ぐ」は京都の、「忌む・負ふ・請ふ・扱コく・掬る・競る・富む・食む・召す」は大阪の他資料に H0型や H1型が報告されている。多くは非日常的な語であることと関係するか。

1.2.7 ところで、以上の A 類・B 類とは別に、C 類として京都では A、大阪では B というような 2 項目、「嗅ぐ」と「止す」とがあった。「嗅ぐ」は《早語類 1》。『杉藤』では高年層 H0型：若年層 L0型という対立が明らかであるし、史的資料からしても古くは H0型であったことは動かないから、『池田資料』の大阪における L0型は新しい型であろう。当然命令形も、もと H1型であったものが L2型に置き換わったと考えられる。『池田資料』京都の命令形に両型記載されているのはそのような事情を反映したものの。基本形は京都でも『池田資料』H0型であるが、『平山』『現日』は L0型のみを記載し、『中井京都』でも L0型が優勢であるから、比較的是やくから L0型も行われたらしい。一方の「止す」は『平山』によれば、東京で基本形 H1型（第二類）、鹿児島では B 型であるから、もともと第二類であった可能性が高いが、とすれば『池田資料』大阪の基本形 L0型が伝統的な姿で、京都の H0型は新型ということになる。

1.3 二・三拍動詞

1.3.1 基本形が三拍で、連用形が二拍の動詞（一段活用）は、『池田資料』では京阪ともに以下のように分類される。【表3】参照。

[3] A（基本形：H0型、命令形：〈一ヨ形〉H2型またはH1型、〈一ロ形〉H2型）38項目

上げる、荒れる、入れる、植える、終える、代える、変える、枯れる、涸れる、嘎れる、極める、暮れる、越える、倒〈コカ〉る、据える、捨てる、添える、染める、溜める、漬ける、出来る、遂げる、止める、抜ける、濡れる、載せる、嵌める、腫れる、負ける、燃える、萌える、焼ける、瘡せる、止める、罷める、揺れる、寄せる、割れる

B（基本形：L0型、命令形：〈一ヨ形〉〈一ロ形〉ともにL2型）56項目

受ける、茹〈ウテ〉る、落る、折れる、掛ける、駈ける、賭ける、切れる、悔いる、朽ちる、肥える、焦げる、捏る、懲りる、冴える、裂ける、避ける、下げる、錆びる、覚める、冷める、褪める、占める、締める、閉める、統べる、攻める、責める、絶える、立てる、詰める、溶ける、綴じる、投げる、撫る、嘗める、舐める、馴れる、逃げる、延びる、伸びる、陳べる、映える、生える、爆〈ハゼ〉る、晴れる、更ける、老ける、伏せる、吠える、褒める、見せる、蒸れる、漏れる、茹る、分ける

C 京都（基本形：H0型またはL0型、命令形：〈一ヨ形〉H1型またはL2型、〈一ロ形〉H2型

またはL2型）大阪（基本形：L0型、命令形：〈一ヨ形〉〈一ロ形〉ともにL2型）1項目
詫びる

D 京阪とも（基本形：H0型またはL0型、命令形：〈一ヨ形〉H1型またはL2型、〈一ロ形〉

H2型またはL2型ただし大阪では命令形：〈一ヨ形〉H2型も）1項目
噓〈ムセ〉る

1.3.2 A類に38項目、B類に56項目、C類・D類それぞれに1項目ずつが分類される。A・Bの諸語はそれぞれ《早語類》二・三拍動詞の第一類・第二類にはほぼ一致する。京阪ではH2型とH1型との統合（昇核現象）が進みつつあり、大阪よりも京都にその進行が早く起こっているの、それが命令形〈一ヨ形〉におけるH2型のあらわれ方に反映しているか。〈一ロ形〉はももとの京阪方言ではないことから、無理に発音すれば、L2型との対応のよいH2型が選ばれたのかもしれない。京阪の強い命令形は、たとえばA類「上げ」H1型、B類「受け」L2型（末尾は下降拍）などとなるのが一般的。

1.3.3 C「詫びる」は《早語類1△×》、D「噓る」は《早語類1△》で、いずれも京阪ではB類のようにあらわれてよいはずのものである。もっとも史的資料からすると「詫びる」が第一類から第二類相当に転じたのは近世以降のようではあるが、『現日』所載の《高知》には第二類H1型とある。『中井京都』所載の「京都府中川」でも同様。一方「噓る」は古く二類型もあったらしい。「京都府中川」はH1型。いずれも他の資料はみな基本形L0型であるのに、『池田資料』のみ基本

形に H0型も、命令形に H1・H2型も記載する。

1.3.4 A類に属す「迷げる」は《早語類 2》である。『池田資料』では京阪いずれも基本形 H0型を記載するのみでうまく対応しないが、他資料にも H0型があり、『池田資料』そのものの信頼性を疑う必要はない。また、命令形(大阪)に L2型があることにも注意が要る。大阪の基本形には L0型も潜在しているに違いない。「萌える」は《早語類 2 #》という古い時代の類別であるから、他資料みな H0型であることを思えば、早く類を変更したものか。

1.3.5 残る「植える・終える・捨てる」は伝統的には基本形 H0型。L0型は後世の置き換わりであろう。『池田資料』には「捨てる」の命令形〈一ロ形〉に L2型が記載されている。基本形に L0型の記載がないのに、命令形にのみこれと対応する型を載せているということは、これも潜在的には L0型もあるとみてよいであろう。

1.3.6 B類に属す「閉める・統べる・生える・蒸れる」についても、いずれかの資料に H0型が記載されている。基本形と命令形は、『池田資料』ではそれぞれ L0型と L2型で型通りの対応をみせるが、他資料には基本形 H0型も散見する。「統べる」など『杉藤』では高年層と若年層の間でアクセント型が置き換わるが、非日常語であることから伝統性を失ったものか。

1.3.7 ところで B類の諸語は、基本形について言えば、かつて H1型だったものが、現代京阪では L0型に置き換わっているものである。『中井大阪』によれば(初期落語)などに古い H1型が聞かれるという。これに比すれば『池田資料』は新しい姿しか伝えていないということになる。

1.4 三拍動詞

1.4.1 つぎに基本形・連用形ともに三拍の動詞を検討する。これらは、『池田資料』で次のような類型に分類されるが、そのほとんどは A類に属する。これは『池田資料』が、すでに動詞アクセント体系が組み替わったあとの姿を反映したからであって、いわゆる三拍動詞(五段活用)の第二類の諸語はその第一類と合同している。問題あるもののみ【表 4】に掲げた。

[4] A (基本形 H0型、命令形 H1型または H2型) 361項目

喘ぐ、仰ぐ、煽ぐ、明かす、明かる、上がる、漁る、急〈アセ〉る、当る、余す、余る、操〈アヤ〉す、荒らす、怒る、逸〈イキ〉る、勇む、弄る、急ぐ、損〈イタ〉む、痛む、到る、祈る、威張る、穿つ、浮ぶ、歌う、写す、移る、染〈ウツ〉る、唸る、蜿〈ウネ〉る、奪う、恨む、潤む、描く、抉る、覆う、拝む、送る、怒る、襲う、落す、嚇す、緘す、劣る、踊る、思う、泳ぐ、下ろす、終わる、返す、帰る、踟む、掛かる、掛る、罹る、限る、囲う、翳す、嵩む、飾る、炊ぐ、齧る、霞む、稼ぐ、語る、騙る、担ぐ、叶う、適う、庇う、被る、通う、絡む、搦む、乾く、躲〈カカ〉す、替る、代る、変る、刻む、軋る、築く、競う、気付く、気張る、極る、嫌う、区切る、括る、潜る、腐る、挫く、砕く、下す、瀉す、下る、曲る、配る、縊る、窪む、曇る、悔む、喰う、暮す、眩む、狂う、食わす、汚す、削る、煙す、煙る、凍る、焦す、擦る、挙る、こなす、好む、拒む、零す、毀つ、困る、籠る、肥やす、凝らす、

懲らす、殺す、転ぶ、探す、盛る、下がる、探る、摩く(サス)る、誘う、諭す、悟る、裁く、
 覚ます、冷ます、曝す、騒ぐ、叱る、頬る、繁む、茂る、沈む、慕う、凌ぐ、偲ぶ、忍ぶ、
 縛る、仕舞う、終く(シマ)う、蔵く(シマ)う、締まる、示す、湿す、湿る、蹲く(シヤガ)む、喋る、
 知らず、記す、透かす、縋る、救う、竦む、選る、荒ぶ、荒む、濯ぐ、漱ぐ、進む、涼む、
 啜る、巢立つ、滑る、住まう、済ます、澄ます、座る、強請く(セガ)む、迫る、唆く(ツシ)る、
 譏く(ツシ)る、注ぐ、嫉む、染まる、叛く、揃う、違く(ツガ)う、滾る、企む、工む、手繰る、
 叩く、正す、糾す、畳む、崇る、辿る、頼む、溜まる、試す、絶やす、頼る、誓う、違う、
 契る、縮む、因む、使う、番く(ツガ)う、掴む、尽す、作る、続く、包む、綴る、集う、繋ぐ、
 募る、詰まる、瞑る、積もる、吊るす、通す、通る、溶かす、尖る、鎖す、閉ざす、届く、
 隣る、止る、泊る、点す、点る、吃る、直す、癒す、癒る、流す、殴る、嘆く、馴染む、
 詰る、懐く、名乗る、靡く、颯る、訛る、悩む、習う、馴らす、並ぶ、匂う、逃がす、握る、
 憎む、濁る、滲む、睨む、盗む、濡らす、願う、嫉む、粘る、値引く、眠る、狙う、残す、
 残る、覗く、望む、延す、上る、登る、計る、図る、励む、運ぶ、挟む、弾く、外す、弾む、
 はたく、果す、放す、離す、話す、省く、侍る、囁す、逸る、流行る、払う、祓う、僻む、
 光る、拉く(ヒシ)ぐ、捻る、響く、開く、捨う、耽る、塞ぐ、防ぐ、太る、肥く(フ)る、震う、
 飾う、減らす、誇る、細る、委す、曲る、捲る、勝る、混る、跨ぐ、纏う、惑う、招く、
 護る、守る、迷う、廻る、乱す、実る、向う、報う、結ぶ、噎く(セ)ぶ、恵む、捲る、巡る、
 申す、戻す、戻る、燃やす、貰う、漏す、野次る、休む、雇う、強請く(ヌ)る、揺る、譲る、
 揺ぐ、緩む、汚す、澱む、力む、沸かす、別つ、解る、判る、分る、渡す、渡る、笑う

B (基本形 L0型、命令形 L2型) 10項目

褪る、遊ぶ、歩く、扶く(コジ)る、拗く(コジ)る、黙る、入る、参る、目立つ、破る

C (その他) 4項目 千切る、嫁ぐ、目指す、限る (…に～)

1.4.2 A類に属するものは、命令形がH2型であったりH1型であったりする。それでも京都では、
 わずかに「巢立つ・隣る」2項目でH1型とともにH2型が掲げられるにすぎないが、大阪ではA
 類所属で命令形を掲載するもの357項目のうち216項目にH2型とH1型とが併記される。残る139項
 目はH1型のみ。「掛る・巢立つ」2項目についてはH2型のみである。

1.4.3 命令形が、京都でH1型、大阪でH2型とH1型并存というのは、京都ではH2型がH1型と
 「型の統合」(昇核現象)を起こしてほぼ完了しているのに対して、大阪ではその最中であること
 を反映しているように見受けられる。命令形がA・B両類とともに(-2)型であるという体系的
 な力が、大阪でより強く働いたと解すべきものかもしれない。さらに命令形について言えば、『池
 田資料』が京都H1型、大阪H2型・H1型并存とする語が、五十音順に配列したとき後半に多くあ
 らわれるようだが、それは途中で採録の方針が固まったことの反映であろうか。

1.4.4 A類に対して、基本形L0型、命令形L2型となるB類はわずかに10項目しかない。『池田資

料』にしか記載のない「拗くヅる」以外は、他資料にもそのように報告されている。

1.4.5 C類の「目指す」は、『池田資料』では京都でA Bいずれにも属し、大阪ではAだというが、他資料においても基本形はH0型かL0型か定まらない。『杉藤』は大阪でL0型が古いことを示唆する。事情は京都でも同じか。「千切る」は、基本形はH0型であるが、命令形では大阪にL2型もあらわれる。他資料では京都ながら『金田一』が基本形L0型を報告するから、全くの誤記とも考えられない。「嫁ぐ」は基本形・命令形ともA B両方の型が載せられている。しかし、こればかりは他資料にそのような形跡をうかがうことはできない。

1.4.6 「限る」はふつうA類所属であるが、「～は…に限る」などという場合には基本形H1型があらわれるという。『中井京都』からもそのような傾向は見取れる。基本形H1型は、『早語類2』に相当する諸語では古い型であり、比較した他資料では『中井京都』に掲載された「京都府中川」のH1型がそれに当る。ただし、同資料では一類相当の比較的多くの語（「仰ぐ・勇む・終る・挫く・挙る・凝らす・偲ぶ・忍ぶ・縋る・妬くクヰむ・尽す・積る・嫁ぐ・省く」）にもH1型が報告される点注意しなければならない。ほかに『中井大阪』をはじめとして『樺垣』『現日』『日国』なども語によっては基本形H1型を報告するが、その数は【表3】の二・三拍動詞よりもやや多いようでもある。

1.4.7 なお『早語類3→2(か)』とされる諸語（「拜む・被る・築く・狂う・下がる・迫る・叛く・願う・恵む・漏す・澱む」）は、いずれもA類に属している。他資料をも含めて、そのいずれかに基本形H1型または同L0型を掲載する項目は【表4】のとおり。

2. 形容詞のアクセント

2.1 二拍形容詞

2.1.1 基本形二拍の形容詞で『池田資料』に掲載されるものは5項目。形容詞の場合は、その連用形「～く」形を併記する。【表5】はその全例。これをA B二つの類に分けることができる。

[5] A (基本形H1型、連用形H1型)	3項目	憂い、濃い、酸い
B (基本形L0型、連用形H1型)	2項目	無い、良い

2.1.2 『池田資料』は「濃い・酸い」およびその連用形に「三音節」と注記した上で、二種類の音調を図示している。一つは基本形が三音節の場合〈高中低〉と下がる音調を示し、もう一つは連用形が三音節の場合〈低高低〉または〈中高低〉というような音調である。京阪いずれにも言及した注記であろう。京都では『金田一』『樺垣』に基本形スィーL2型があるが、図示された音調とは異なる。連用形は『中井京都』に「連用形+テ(共通語的)」としてスークテL2型、「連用形(共通語的)+ナル」としてスークL2型が記載されていて、こちらは『池田資料』と符合する。大阪では『牧村』にコーイH1型が載っているが、「酸い」はスィH1型とあるのみ。『中井大阪』(松鶴)にはコーイL2型がある。

2.2 三拍形容詞

2.2.1 基本形三拍の形容詞はすべてが、基本形・連用形ともに同じである。二類の別がなくなり、合同したのちの姿を反映する。

[6] (基本形 H1型、連用形 L2型) 62項目

青い、赤い、浅い、厚い、暑い、甘い、淡い、痛い、薄い、疎い、甘く(ワマ)い、巧く(ウマ)い、偉い、多い、遅い、重い、堅い、固い、痒い、辛く(カラ)い、軽い、強く(キツ)い、清い、臭い、暗い、黒い、煙い、強く(コク)い、怖い、脆く(カ)い、寒い、白い、狡い、狭い、高い、近い、辛く(ツラ)い、遠い、長い、苦い、鈍い、温く(ヌク)い、熱い、眠い、鈍く(ノロ)い、早い、低い、酷く(ヒド)い、広い、深い、太い、古い、細い、円い、穢く(ケガ)い、脆く(モロ)い、安い、柔く(ヤ)い、弛く(ユル)い、弱い、若い、悪い

2.3 四拍形容詞

2.3.1 基本形四拍の形容詞で『池田資料』に掲載されるものは58項目。およそは京阪とも A類基本形 H2型、連用形 H2型または H3型であるが、それ以外のものを便宜 B類として括った。【表6】には便宜ク活用・シク活用を分けて掲げてある。全体としては、『早語類』の一・二類の別が失われ、A類に合同したとみてよい。

[7] A (基本形 H2型、連用形 H2型または H3型) 51項目

明るい、危ない、危うい、怪しい、五月蠅く(ウルサ)い、嬉しい、可笑しい、賢い、悲しい、可愛い、厳しい、悔しい、苦しい、詳しい、気高い、毛深い、険しい、恋しい、小高い、細かい、淋しい、親しい、少ない、素気(スゲ)ない、涼しい、素早い、鋭い、楽しい、容易く(ヤス)い、近しい、尊い、乏しい、名高い、儂く(ハナ)い、歯痒い、久しい、等しい、美々しい、貧しい、目映ゆい、眩しい、短い、醜い、目聡い、目出度い、目ぼしい、女々しい、優しい、疚しい、床しい、佻しい

B (その他) 6項目 大きい、穢い、気長い、小さい、手早い、宜しい

2.3.2 もともとシク活用の『早語類2』に所属する「嬉しい・厳しい」などは、基本形 H2型、連用形 H1型が伝統的なものであったが、それぞれ一類型の基本形 H3型、連用形 H3型との間で混乱を来たし、型の統合 (H3・H2 > H2 / H2・H1 > H1、昇核現象とも) や活用形間の類推も手伝って、体系が落ち着くまでの過程には連用形 H2型などもあらわれるようになる。基本形の H1型は二類型の古終止形アクセントの影響もあったか。詳細は上野和昭 (1995) 「類推と統合」(『早稲田日本語研究』3) 参照されたい。

2.3.3 四拍形容詞の基本形が H2型に収束した様子を見せているのは、すでに三拍形容詞で基本形が H1型にまとまっていることと呼応し、基本形全体が拍数を越えて H(-3) 型で安定していることの反映であろう。B類の「大きい・小さい」に聞かれる基本形 H1型は、第二拍が特殊拍であることと関係していようか。他資料にも H1型は採られている。また異語形が多く報告されている

ことにも注意。同じく『池田資料』で基本形に H1型が採られている「宜しい」も、他資料でもこの型を採録している。『平山』『中井京都』は H1のみ。『日国』では H2・H1両様。

2.3.4 連用形に H3型ばかりでなく H2型も採られているのは、「型の統合」の力と、連用形を（一）2）型に、すなわちこの場合は H3型にまとめようとする体系的な力とが、まだ互いに譲らないでいる実態を反映しているものと解釈できようか。L3型は、H3型の強調形かと思われる。「気長い」は、他資料には採られていないので確認できないが、「手早い」の連用形 L3型は、『日国』が基本形ながら L3型を報告する。

3. まとめ

3.1 『池田資料』所載の動詞・形容詞のアクセントは、京阪アクセント史上に位置付けるについてとくに問題となるものはない。他資料に見えない型を載せたところは1.4.5の「嫁ぐ」くらいしか指摘できない。

3.2 動詞アクセントは、三拍動詞アクセント体系が組み替わったのちの姿を見せている。中井（2000; 5）の「大阪の話者は、明治10年以降の生まれ」という推定は、明治初年以前に生れた落語家の録音資料をもとに判断したものであろうが、秋永（2000）の「1900年以前」という推定にも矛盾しない。ただし落語家録音資料の資料性の問題など、検討の余地はある。

3.3 形容詞アクセントも、すでに三拍・四拍ともに体系的な組替えが終わった段階のアクセントを記載している。

3.4 動詞・形容詞アクセントの体系組替えとアクセント型の統合（昇核現象）とがどう関係するかは今後の問題として残る。

3.5 ここでは扱えなかったが、〈動詞+動詞〉の複合動詞も接合段階から進んで一語なみのアクセントになっている。これらからすると、動詞・形容詞の基本形に関するかぎり『池田資料』のアクセントは現代のそれとほぼ同じであると言ってよいようである。ただし、京阪の大きな差はない模様。一部動詞命令形にわずかにうかがえる程度。

3.6 京阪において動詞・形容詞アクセントの体系が組替えられたのは、『池田資料』の話者を20世紀初頭の生育者とするならば、それ以前であったと推定するのが妥当であろう。しかし、19世紀の状態については、いまだ資料が少なく決定的なことは言えない。

（付記）本稿は、平成14年度科学研究費補助金基盤研究（C）（1）課題番号12610439「日本語アクセント史総合データベースの構築とその発展的研究」（研究代表者 秋永一枝）による研究成果の一部である。

【表1】一・二拍動詞 (全)

基本形	早語類	京1	京2	金田一	榎垣	平山	中井	現日	日国	阪1	阪2	杉藤	中井	現日	命令形	京都	大阪
居(ゐ)る	1	H0		H0	H0	H0	H0	H0	H0	H0		H0	H0	H0	居よ	H1	H1
射る	1×	H0	L0	L0	H0	H0	H0/L0	/	H0	H0	L0	L0/H0	/	/	射よ	H1	H1
鑄る	1×	H0		L0	H0	H0	H0/L0	/	H0	H0		H0/L0	/	/	鑄よ	H1	H1
得る	う2△	H0		/	H0	H0	H0	/	H0	H0		H0	L0	/	得よ	H1	H1
(為る)	す1	/		H0	H0	H0	H0	H0	H0	/		H0 (L0?)	H0	H0	為ろ/為い/ 為よ	H1	H1
似る	1	H0		H0	H0	H0	H0	H0	H0	H0		H0	/	H0	似よ	H1	H1
煮る	1	H0		H0	H0	H0	H0	/	H0	H0		H0	/	/	煮よ	H1	H1
寝る	ぬ1	H0		H0	H0	H0	H0	H0	H0	H0		H0	H0	H0	寝よ	H1	H1
経る	ふ2△	H0		L0	H0	H0	H0	/	H0/L0	H0		H0/H1	/	/	経よ	H1	H1
															経ろ	H1	H1
基本形	早語類	京1	京2	金田一	榎垣	平山	中井	現日	日国	阪1	阪2	杉藤	中井	現日	命令形	京都	大阪
出る	いづ2	L0		L0	/	L0	L0	L0	L0	L0		L0	L0	L0	出よ	H1	H1
見る	2	L0		L0	L0	L0	L0	L0	L0	L0		L0	L0	L0	見よ	H1	H1
来る	く2	L0		L0	L0	L0	L0	L0	L0	L0		L0	L0	L0	来い	H1	H1

【表2】二拍動詞 (抄)

基本形	早語類	京1	京2	金田一	榎垣	平山	中井	現日	日国	大阪	杉藤	中井	現日	ほか	命令形	京1	京2	大阪
居(ゐ)る	3	H0		H0	H0	H0	H1/H0	/	H1	H0	H0,H1,L0>L0	/	/	/	居れ	H1		H1
織る	1×	H0		L0	/	L0	H0/L0	L0	H0	H0	L0	/	L0	/	織れ	H1		H1
死ぬ	3→1	H0		H0	H0	H0	H0	H0	H0	H0	H0	H0	H0	牧(H0)	死ぬ	H1		H1
添う	1	H0		H0	H0	L0	H0/L0	/	H0	H0	H0	/	/	/	添え	H1		H1
退く	1	H0		H0	H0	H0	H0	/	H0	H0	H0>L0	/	/	襟L0 牧H0	退け	H1		H1
舞う	1	H0		H0	H0	H0	H0	/	H0	H0	H0(L0?)	H0	/	牧H0	舞え	H1		H1
結う	1	H0		H0	H0	H0	H0	H0	H0	H0	H0(L0?)	/	H0	/	結え	H1		H1
沸く	1	H0		H0	H0	H0	H0	/	H0	H0	H0(L0?)	/	/	/	沸け	H1		H1
湧く	1	H0		H0	H0	H0	H0	/	H0	H0	H0(L0?)	H0	/	牧・堀H0	湧け	H1		H1
基本形	早語類	京1	京2	金田一	榎垣	平山	中井	現日	日国	大阪	杉藤	中井	現日	ほか	命令形	京1	京2	大阪
飽く	2	L0	H0	L0	L0	/	L0	/	L0	L0	L0/H0	/	/	牧L0	飽げ	L2		L2
忌む	2#	L0		L0	/	L0	L0	/	L0	L0	L0(H0?)	/	/	/	忌め	L2		L2
笑む	1△×	L0		/	/	/	L0	/	L0	L0	L0(H0?)	/	/	/	笑め	L2		L2
負う	2	L0		L0	L0	L0	L0	/	L0	L0	L0(H0?)	L0	/	牧(L0)	負え	L2		L2
請う	2	L0		L0	L0	L0	L0	/	L0	L0	L0/H0	/	/	/	請え	L2		L2
抜く	2	L0		/	/	L0	L0	/	L0	L0	H0(L0?)	/	/	/	抜げ	L2		L2
凝る	1△×	L0		L0	L0	L0	L0	/	L0	L0	L0	L0	/	/	凝れ	L2		L2
占る	1	L0		L0	H0	L0	L0	/	L0	L0	L0	/	/	襟L0	去れ	H1	L2	L2
拘る		L0		/	L0	/	L0	/	L0	L0	L0/H0	/	/	/	拘れ	L2		L2
競る		L0		L0	/	L0	L0	/	L0	L0	L0/H1	/	/	/	競れ	L2		L2
搦く	2	L0		L0	/	L0	L0/H0	L0	L0	L0	L0	L0	L0	/	搦げ	L2		L2
富む		L0		L0	L0	L0	L0	/	L0	L0	L0/H0	/	/	/	富め	L2		L2
風ぐ		L0		L0	L0	H0	L0	/	L0	L0	L0(H0?)	/	/	/	風げ	L2		L2
食む	2#	L0		/	/	/	L0	/	L0	L0	L0/H1	/	/	/	食め	L2		L2
増す	1	L0		H0	H0	L0	L0	/	L0	L0	L0/H0	/	/	/	増せ	L2		L2
満つ	2	L0		H1	H1/L0	/	/	/	L0	L0	/	/	/	/	満て	L2		L2
召す	2	L0		L0	L0	L0	L0	/	L0	L0	L0(H0?)	/	/	/	召せ	L2		L2
捲く		L0		L0	H0	L0	L0	/	L0	L0	L0	/	/	/	真げ	L2		L2
病む	2	L0		L0	L0	H0	L0	H0	L0	L0	L0(H0?)	/	L0	/	病め	L2		L2
基本形	早語類	京1	京2	金田一	榎垣	平山	中井	現日	日国	大阪	杉藤	中井	現日	ほか	命令形	京1	京2	大阪
喫ぐ	1	H0		H0	H0	L0	L0/H0	L0	H0	L0	H0>L0	/	L0	/	喫げ	H1	L2	L2
止す		H0		H0	H0	H0	L0	/	H0	L0	L0	/	/	牧L0	止せ	H1		L2

【表 3】二・三拍動詞（抄）

Table with 19 columns: 基本形, 早語類, 京1, 京2, 金田一, 榎垣, 平山, 中井, 現日, 日国, 阪1, 阪2, 杉藤, 中井, 現日, ほか, 命令形, 京1, 京2, 阪1, 阪2, 阪3. Rows include verbs like 枕える, 終わる, 捨てる, 出来る, 逃げる, 萌える, 閉める, 統べる, 生える, 蒸れる, 叱びる, 唸る.

【表 4】三拍動詞（抄）

Table with 19 columns: 基本形, 早語類, 京1, 京2, 金田一, 榎垣, 平山, 中井, 現日, 日国, 阪1, 阪2, 杉藤, 中井, 現日, ほか, 命令形, 京1, 京2, 阪1, 阪2, 阪3. Rows include verbs like 思う, 掛かる, 替る, 被る, 刻む, 区切る, 繰る, 喰う, 仕す, 困る, 盛く, 住う, 蹴む, 濟す, 叩く, 頼む, 頼る, 頼む, 作る, 溶かす, 巻る, 殴る, 馴らす, 逃がす, 頼う, 捨う, 耽ける, 喰ふ, 申す, 漏す, 沸かす, 別つ, 分る, 千切る, 嫁ぐ, 限る, 目指す.

【表5】二拍形容詞(全)

基本形	早語類	京都	金田一	榎垣	平山	中井	現日	日国	大阪	杉藤	中井	現日	ほか	連用形	京都	阪1	阪2	大阪
愛い	2#	H1	/	/	/	/	/	H1	H1	/	/	/	/	愛く		H2	H3	H1
濃い	1か	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	/	H1	牧H1コイ	濃く	H1	H1	H1	H1
酔い	2か	H1	H1(スイ-L2)	H1(スイ-L2)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	/	H1	牧H1	酔く	H1	H1	H1	H1
無い	2	L0	L0	L0	L0	L0	L0	L0	L0	L0	L0	L0	/	無く	H1	H1	H1	H1
良い	2	L0	L0	L0 ₁₋	L0	L0 ₁₋	L0 ₁₋	L0	L0	L0	L0	L0	牧L0 ₁₋ 堀	良く	H1	H1	H1	H1

【表6】四拍形容詞(抄)

基本形	早語類	京1	京2	金田一	榎垣	平山	中井	現日	日国	阪1	阪2	杉藤	中井	現日	ほか	連用形	京1	京2	京3	阪1	阪2	阪3	
少ない		H2	H2	H1	H2	H2	H2	H2	H2	H2	H2	H2	/	H2スナナ!	牧H2スナナ!	すくなく	H2	H3		H2	H2	H3	
柔早い		H2	H2	H1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	すばやく	H3	H2		H2	H2	H3	
小さい		H2	H2	H1	H1>H2	H1	H1	H1	H2	H2	H1	H1>?H2	H1チソフ・チヤヤ・チヤヤ!	H1チソフ・チヤヤ!	牧H1チソフ・チヤヤ! 小兒, 堀H1チソフ・チヤヤ! コイ・チヤヤ・チヤヤ!	ちいさく	H2	H3		H2	H2	H3	
手早い		H2	H2	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	てばやく	H2			L3	H2		
大きい		H1	H2	H1	H2/H1	H1	H1	H2	H2/H1	H1	H2	H1>?H2	H2/チソフ・チヤヤ・チヤヤ! H3/チソフ・チヤヤ・チヤヤ! L3(強)チソフ・チヤヤ! L0(強)	H2	牧チソフ・チヤヤ! チヤヤ・チヤヤ!	おおきく	H3	H1	H2	H3	H2		
穢い		H3	H2	H2	H2	H2	H2	H2	H2	H2	H2	H2	/	H2	牧(キリ)・L3	きたなく	H2	H3		H2	H2	H3	
気長い		L3	H2	/	/	/	/	/	/	L3	H2	/	/	/	/	きながく	L3	H2		L3	H2	H3	
基本形	早語類	京1	京2	金田一	榎垣	平山	中井	現日	日国	阪1	阪2	杉藤	中井	現日	ほか	連用形	京1	京2	京3	阪1	阪2	阪3	
蒸しい	さぶし2か	H2		H1	H2	H2	H2	H2	H2	H2	H2	H2	/	H2ナレ!		さびしく	H3	H2		H3	H2		
楽しい	2	H2		H2	H2	H2	H2	H3	H2	H2	H2	H2	/	H2		たのしく	H2			H2	H3		
久しい	2	H2		H2	H2	H2	/	/	H2	H2	H2	H2	H2	/		ひさしく	H3	H2		H3	H2		
優しい	1	H2		H2	H2	H2	H2	H3	H2	H2	H2	L3	H2	H2ナレ!		やさしく	H2			H2	H3		
床しい		H2		H2	H2	H2	/	/	H2	H2	H2	/	/	/		ゆかしく	H2	H3		H3	H2		
直しい	1	H1	H2	H2	H2	H1	H1	/	H2/H1	H1	H2	H2	H2	/	牧H1/H1ヨ ら, 堀H2	よろしく	H2			H3	H2		